

『小学校における軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題に関する研究

－公立A小学校の諸児童記録を手がかりに－』

特別支援教育専攻 特別支援教育コース

M05-1208 好田 奈都紀

指導教員 加瀬 進

I. 問題の所在

1. 軽度発達障害に関する近年の動向

教育現場においては、平成19年度より特別支援教育が開始される。特別支援教育では、これまでの特殊教育の対象に加え、LD、ADHD、高機能自閉症等が支援の対象となる。特別支援教育は、障害のある児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取り組みを支援するという視点に立ち、児童生徒の一人一人の教育的ニーズを把握し、そのもてる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するために、適切な指導及びきめ細やかな支援を行うものである。このような軽度発達障害の児童生徒への対応は、教育のみならず、「新障害者基本計画」や「発達障害者支援法」など福祉においても、支援の重要性が述べられている。

2. 学習と家庭基盤の重要性

国による軽度発達障害児への支援の方向性は、自立と社会参加を目指している。では、自立のために必要な事柄はなんだろうか。宮本(2004)は、エリクソンの発達課題を下に、自立に必要な事柄を明らかにするとともに、それを得るためには、Eriksonの発達課題の達成が望まれることを指摘している。児童期における発達課題は、学習(勤勉性)である。また、ユネスコによる学習権宣言においても、「学習権なくしては、人間的発達はあり得ない」と述べられており、成人に至っても学習が重要であることがわかる。これらの基礎である児童期における学習を保障することは、とても重要である。

しかしながら、軽度発達障害の児童は、学習に躓くことがしばしばある。それらの要因として①障害起因による問題、②自己肯定感の低さに関連する問題が挙げられてきた。このどちらも、自己肯定感の低さに関連し、そのことは、学習の達成の妨げとなる。つまり、学習の保障を考えるときに、自己肯定感に対する支援が重要であるといえる。これは、マズローによる欲求階層の捉え方と一致している。学習欲求を持つためには、その下の自己効力感が満たされていることが必要である。しかしながら、欲求階層にはより下位の項目があり、それらが満たされない場合には、自己効力感も満たされない。自己効力感より下位の項目は、生活に密接に関わる欲求である。これらを満たすことに脆弱性がある場合には、自己効力感欲求を持つことができず、より上位の学習に対する欲求に対して支援を行っても、学習に対する欲求が低いため効果がみられにくくなってしまふのである。

しかしながら、軽度発達障害を有する児童の家庭においては、しばし、家庭基盤が脆弱な場合がある。先行研究では、ADHD児の母親の不安とうつに関する問題、軽度発達障害児の育てにくさ、発達障害と虐待との関連が指摘されており、軽度発達障害児は、家庭生活の基盤を揺らがす可能性のある要因を多く持ち合わせていることがわかる。軽度発達障害児においては、学習に取り組む前に満たされるべき、家庭生活における問題を有していると考えられる。

3. 家庭基盤の脆弱性を生む社会的背景

軽度発達障害児の家庭基盤が脆弱になるのであろうか。その社会的背景として、軽度発達障害児は、生来の障害を抱えているにも関わらず、障害者福祉制度の狭間にあることや、支援体制が少ない現状があげられる。支援が十分に行き届かない状況下においては、これまで示してきたような軽度発達障害の児童を取り巻くさまざまな問題や家庭基盤を揺るがすような要因を家庭のみが抱え込む状態を生んでしまう。こういった現在の社会背景が軽度発達障害の児童を抱える家族の家庭基盤を脆弱な状態へと導いてしまうのである。

4. 軽度発達障害の支援課題に関する先行研究

これまでの軽度発達障害児に関連する支援課題の先行研究のレビューをもとに現段階における支援課題の把握がどこまで行われているかを概観した。先行研究で明らかにされている点は、①学習場面における支援課題、②語りや状態像から把握される支援課題、③保護者の望む支援から明らかにされた軽度発達障害児の支援課題である。軽度発達障害児をとりまく支援課題は、児童本人だけのものではない。けれども、特別な教育的ニーズに対する支援を行うということで、保護者の問題や家族における支援課題は、支援の対象としてみなされない場合がある。学習と密接に関連する家庭基盤の問題は、保護者の問題や家族のニーズであっても支援の対象として捉えることが重要である。

これらのことから、学習と密接に関連する家庭基盤に対する支援課題を明らかにすることが望まれる。しかしながら、特別な教育的ニーズの発生要因となるような家庭基盤の支援課題を明らかにした研究がないのが現状である。また、そのような学習と関連する家庭基盤に対する支援課題に対して、名称がつけられていない。そこで、本研究では、学習に密接に関連する家庭基盤の支援課題を、〈学習・家庭生活〉支援課題とする。

II. 本研究の目的

本研究は、小学校における軽度発達障害児の〈学習・家庭生活〉支援課題を明らかにすることを目的とする。

○ 本研究における軽度発達障害児の範囲

本研究における「軽度発達障害」の範囲は、LD、ADHD、高機能自閉症、アスペルガー症候群とし、軽度知的障害は除くこととする。

○ 〈学習・家庭生活〉支援課題の定義

本研究における〈学習・家庭生活〉支援課題とは、「特別な教育的ニーズの発生要因として把握される、家庭における生活基盤の脆弱性」を指すこととする。

○ 本研究における学習について

本研究における学習は、狭義の教科学習だけではなく、発達課題を視野にいれた学校生活全般における体験も含めることとする。

Ⅲ. 本研究における方法

1. 方法

目的を達成するために、次の作業課題を設定する。

研究の対象校である公立A小学校は、特別な教育的ニーズをもつ児童に対して、児童本人のみならず、家庭への支援も行っている。公立A小学校の場合、こうした支援に関してさまざまな諸児童記録を残している。そこにはニーズを同定する手がかりとなる記述等が少なからず存在する。しかしながら、公立A小学校の場合、記録の整理・分析が行われていないため、何が家庭基盤の脆弱性を生んでいるのかをつかむことができず、「家庭が荒れている」「保護者にも理解が必要」といった一般記述で止まってしまっている現状がある。換言すれば、公立A小学校における諸児童記録を整理・分析することで、〈学習－家庭生活〉支援課題を明らかにすることが可能と考えられる。そこで、次のような作業課題を設定し、整理・分析を行うこととした。

作業課題① 特別な支援を必要とする児童の支援課題の項目分析

学校現場における記録は書式としても、記述内容面でも多岐にわたっている。従って、当初から一定の書式、記述内容を特定して〈学習－家庭生活〉支援課題を抽出する作業を行うと重要な記述内容を見落とすリスクが発生することが想定される。また、すべての支援課題を明らかにすることで、いっそう〈学習－家庭生活〉支援課題を明快に浮き彫りにできると考えた。そこで、第一に既存の記録すべてを整理・分析して支援課題の全容を明らかにすることとした。

作業課題② 支援課題の項目抽出後、軽度発達障害児群、その他の障害児群、支援群の3群にわけ、軽度発達障害児群における支援課題項目の傾向を分析する。

軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題を明らかにするには、作業課題①で行う全支援課題との対比と同時に、軽度発達障害を有さない児童において見られる支援課題との比較を行う必要がある。そこで、作業課題①を通して抽出した全支援課題の中から、軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題を明らかにするに先だって、すべての支援課題を俯瞰した際に、軽度発達障害児において特徴的な支援課題の傾向を分析することとした。

作業課題③ 軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題である項目を特定する。

軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題を特定するために、まず作業課題②で明らかにした軽度発達障害児の支援課題と、これまでも公的なサービスの対象であった障害児群との支援課題との比較を行い、次に作業課題②で明らかになった支援群の支援課題の中から、家庭基盤に関わると考えられる項目の特定および、3群すべてにおいて環境因子が関係していると思われる項目の特定を行い、以上の結果をもとに軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題の項目を特定することとした。作業課題③において以上の手続きを設定した理由は、これまでも公的なサービスの対象であった児童の支援課題や、支援群の支援課題の中から、家庭基盤に関わると考えられる項目、および3群すべてにおいて環境因子が関係していると思われる項目は、家庭基盤に関連した支援課題の項目を多く含んでいると考えられるため、それらと比較、対比させることで、軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題を浮かび上がらせることができると考えたからである。

なお、軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題の項目の補足的な検討として、軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題の項目が、保護者においても支援課題として認識されているか

どうかの確認を行うため、公立A小学校における特別な支援を必要とする児童 50 名の保護者の中から数名に聞き取りも行うこととした。

2. 本研究における対象児童について

公立A小学校通常学級在籍児童 535 名中、2003 年度から 2006 年度までに 1 度でも特別支援教育の対象となった児童（経過観察の児童含む）58 名中、文書化された記録が確認できない経過観察、転出の児童 8 名（男 5 名、女 3 名）を除く、50 名（以下：特別な支援を必要とする児童）の記録が分析対象とする（2006 年 3 月現在、巻末資料①【対象 50 名のリストーニーズ発生時表】参照）。軽度発達障害児はその内、「LD、ADHD、高機能自閉症、アスペルガー症候群」の診断を受けているか、その疑いがあるとされている児童とする。

IV. 本研究の作業課題別の手続き及び結果

1. 作業課題① 特別な支援を必要とする児童の支援課題の項目分析

(1) 手続き

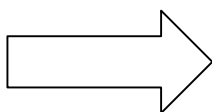
公立A小学校における特別な支援を必要とする児童の諸児童記録を一人 1 フォルダに電子ファイル化を行い、その後電子ファイル化を行った特別な支援を必要とする児童の諸児童記録を、3 種類の分析シート、即ち〈フェイスシート〉、〈標準 24 時間対応表〉、〈ニーズ対応整理表〉に再整理した（巻末資料②③④参照）。

次に、軽度発達障害児を含む公立A小学校における特別な支援を必要とする児童を、特別な支援を必要とする児童とし、それら児童の支援課題の項目を抽出する。3 種類の分析シートに記載された特別な支援を必要とする児童 50 名のエピソードを抽出し、同じカテゴリーごとに分類し、小項目を作成する。

例えば、50 名に関するさまざまなエピソードを、学習内容が理解できない、学習が成立しにくい、繰り返り上がりの計算ができない、学習の遅れが目立つ等、同類、似通っているとみなすことのできるエピソードごとに小グループを作成する（Figure 5 参照）。そして、その小グループごとに項目名をつける。例であげたエピソードの群は、学習に関連するエピソードであったので、学習の遅れとした。それにより、652 個のエピソードより、67 の小項目を抽出した。

Figure5 小項目作成の例

- ・ 学習内容が理解できない
- ・ 学習が成立しにくい
- ・ 繰り返り上がりの計算ができない
- ・ 学習の遅れが目立つ



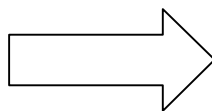
小項目

学習の遅れ

67 の小項目を、エピソード同様に同類、似通っている項目ごとに分類する。例えば、学習の遅れ、学習取り組み姿勢の問題、学校生活行動は、いずれも学校における課題とし、学校場面支援課題とした。それにより 16 項目の大項目を抽出した（Figure6 参照）。

Figure6 大項目作成の例

- ・ 学習の遅れ
- ・ 学習取り組み姿勢の問題
- ・ 学校生活行動



大項目

学校場面課題

その後、抽出された 16 項目を、特別な支援を必要とする児童の本人に関する項目と、特別な支援

を必要とする児童の家族に関する項目に分類した。それぞれ、8項目ずつにわけられた。よって、特別な支援を必要とする児童の本人に関する支援課題8項目、特別な支援を必要とする児童の家族に関する支援課題8項目の全16項目の支援課題が抽出された。

項目抽出の作業にあたり、対象校における特別支援教育コーディネーターにより、項目の分類に関するエキスパートレビューを受け項目の確認を行った。

(2) 結果

以上の作業により、特別な支援を必要とする児童の本人に関する支援課題8項目、特別な支援を必要とする児童の家族に関する支援課題8項目の全16項目の支援課題が抽出された。

抽出された、特別な支援を必要とする児童の本人に関する支援課題の項目は、①障害特性、②社交とコミュニケーション、③身辺自立、④社会的行動問題、⑤健康、安全、心理医療ケア、⑥学校-家庭協働課題、⑦学校場面課題、⑧家庭場面課題である。特別な支援を必要とする児童の家族に関する支援課題の項目は、①養育態度、②親の子ども理解、③子育てストレス、④親の身体・心理的健康、⑤社会への参加、⑥きょうだいに関する問題、⑦家庭内の問題、⑧送迎・移動である。

Figure7 特別な支援を必要とする児童の支援課題項目一覧

特別な支援を必要とする児童の本人に関する支援課題	特別な支援を必要とする児童の家族に関する支援課題
① 障害特性 ：衝動性、多動性、注意欠陥、聴覚認知、空間認知、状況判断、不器用、学習障害、言語障害、こだわり	① 養育態度 ：虐待・ネグレクトの疑い、不適切な養育態度
② 社交とコミュニケーション ：コミュニケーション、ソーシャルスキル、対人関係	② 保護者の子ども理解 ：保護者の子ども理解
③ 身辺自立 ：身辺自立、生活リズム、保護者不在時の問題、最低限の生活の保障	③ 子育てストレス ：保護者の真剣な養育態度、子育てに対する不安、養育困難
④ 社会的行動問題 ：反抗的態度、暴言・暴力、社会的行動問題	④ 保護者の身体・心理的健康 ：保護者の障害・疾患、保護者の心理的疾患
⑤ 健康、安全、心理医療ケア ：合併症、身体症状、ストレス症状、衛生面、精神的な幼さ、情緒、敏感さ、自己主張が強い、感情表出が少ない、自殺願望、うつの症状、自信がない	⑤ 社会への参加 ：外国人の親、コミュニティとの関係
⑥ 学校-家庭協働課題 ：忘れ物、宿題、不登校・登校しぶり、遅刻、通学の安全、問題となる行動、偏食・好き嫌い、薬の服用、卒業後の進路	⑥ きょうだいに関する問題 ：きょうだいに関する問題、きょうだいの数、障害を持つきょうだいの問題
⑦ 学校場面課題 ：学習の取り組み姿勢の問題、学習の遅れ、いじめをする、いじめを受ける、集団行動、教室不適應、学校生活行動	⑦ 家庭内の問題 ：夫婦の問題、金銭面、単親家庭
⑧ 家庭場面課題 ：親子間の問題、家庭内暴力	⑧ 送迎・移動 ：送迎・移動

2. 作業課題② 軽度発達障害児群における支援課題項目の傾向分析

(1) 手続き

作業課題①の特別な支援を必要とする児童50名に関するエピソードより明らかになった項目をもとに、軽度発達障害児群、その他の障害児群、支援群の児童がどの項目に支援課題を抱えているかの傾向分析を行う。そのために、特別な支援を必要とする児童50名の分析シートにおけるエピソードを、特別な支援を必要とする児童の支援課題の項目分析で抽出された小項目名に置き換え（ラベリング）を行う（Figure8参照）。ラベルを置き換えた後に、小項目ごとの該当者数を積算し、各群（軽度発達障害児群、その他の障害児群、支援群）の分布傾向、及び軽度発達障害児群における支援課題の傾向を分析する。

Figure8 分析シートにおけるエピソードのラベリングの例

エピソード	小項目
<ul style="list-style-type: none"> 学習が難しいと思うと初めから取り組もうとしない 話を聞く体制になるまでに時間がかかる 	学習取り組み姿勢の問題
<ul style="list-style-type: none"> 家庭では本児の実態を十分に把握していない 	親の子ども理解
<ul style="list-style-type: none"> 対人交流の滞り 友達を誘うことはしない 	対人関係

(2) 結果

Table74 に、「②社交とコミュニケーション」の対比表を示す。「社交とコミュニケーション」では、コミュニケーション、ソーシャルスキル、対人関係ともに軽度発達障害児群の該当が一番多かった。特に、対人関係では、軽度発達障害児群は該当者が多く、軽度発達障害児群の80%以上が該当していた。低学年、高学年ともに高い割合であるが、特に、高学年軽度発達障害児群での該当者の割合は100%であり、対人関係が軽度発達障害児群の支援課題であることがわかる。

また、コミュニケーションでは、低学年軽度発達障害児群において一番高い割合であり、ソーシャルスキルでは、高学年軽度発達障害児群において一番高かった。これら、対人関係の基礎となる項目に対しても、軽度発達障害児群は支援課題を抱えていることがわかる。



Table74

②社交とコミュニケーション

カウント数 →61 カウント (15.0%)

支援課題		軽度群 16人	学年別		その他群 15人	学年別		支援群 19人	学年別	
			低12	高4		低10	高5		低13	高6
コミュニケーション 16人	人	7	6	1	5	3	2	4	3	1
	%	44	50	25	33	30	40	21	23	17
ソーシャルスキル 14人	人	5	3	2	4	2	2	5	3	2
	%	31	25	50	27	20	40	26	23	33
対人関係 31人	人	13	9	4	8	6	2	10	7	3
	%	81	75	100	53	60	40	53	54	50

*各%は各群ごとの対象人数、各群内の学年別対象人数を分母として算出した。

 支援課題の小項目ごとにみた3群比較で最も高い値
 各群ごとの学年別にみた比較で最も高い値

なお、他の項目に関する対比表は、巻末資料⑥を参照。

このような各群における比較を行ったことで、以下の2点の事柄が明らかになりました。

- 1、 軽度発達障害児群における支援課題は、特別な支援を必要とする児童50名における支援課題67項目全てに一致する。
- 2、 軽度発達障害児群は、他の群に比べ、特徴的な傾向を示す支援課題を多く持つ。

軽度発達障害児群の特徴的な支援課題について、以下に示す (Figure31 参照)。

Figure31

軽度発達障害児群における特徴的な本人に関する支援課題	軽度発達障害児群における特徴的な家族に関する支援課題
<ul style="list-style-type: none"> ①障害特性 多動性、注意欠陥、聴覚認知、空間認知、状況判断、学習障害、こだわり ②社交とコミュニケーション コミュニケーション、ソーシャルスキル、対人関係 ③身辺自立 生活リズム ④社会的行動問題 社会的行動問題 ⑤健康・安全・心理医療ケア 合併症、衛生面、情緒、敏感さ、自殺願望、うつ症状、自信がない ⑥学校-家庭協働課題 不登校・登校渋り、通学の安全、問題となる行動、偏食・好き嫌い、薬の服用、卒業後の進路 ⑦学校場面課題 いじめをする、いじめを受ける、教室不適應 ⑧家庭場面課題 親子間の問題、家庭内暴力 	<ul style="list-style-type: none"> ①養育態度 ②保護者の子ども理解 保護者の子ども理解 ③子育てストレス 保護者の真剣な養育態度、子育てに対する不安、養育困難 ④保護者の身体・心理的健康 保護者の障害・疾患、保護者の心理的疾患 ⑤社会への参加 ⑥きょうだいに関する問題 きょうだいに関する問題 ⑦家庭内の問題 夫婦間の問題、金銭面 ⑧送迎・移動

これらに挙げたとおり、半数以上の項目で、軽度発達障害児群が一番高い割合で該当していた。特徴的な項目の中には、現在軽度発達障害を取り巻く問題として、さまざまな分野の研究で指摘されている項目を含んでいる。社会的行動問題は、非行と密接に関わる支援課題であり、軽度発達障害児と非行に関する問題の指摘と重なる。不登校・登校渋りや、いじめといった問題と、軽度発達障害の関連についても指摘は多く、軽度発達障害児の中には、ひきこもり等の二次的な問題を抱えてしまう場合もある。子育てストレスに関連する事柄としては、周りの無理解や公的サービスのなさといったような現状とも関連する。

3. 作業課題③ 軽度発達障害児の〈学習-家庭生活〉支援課題の特定

(1) 手続き

軽度発達障害児の〈学習-家庭生活〉支援課題を特定するために以下の4つの作業を行う。

- ① まず、作業課題②で明らかにした軽度発達障害児の支援課題と、これまでも公的なサービスの対象であった障害児群との支援課題との比較を行う。
- ② 作業課題②で明らかになった支援群の支援課題の中から、家庭基盤に関わると考えられる項目の特定および、3群すべてにおいて環境因子が関係していると思われる項目の特定を行う。
- ③ 以上の結果をもとに軽度発達障害児の〈学習-家庭生活〉支援課題の項目を特定する。
- ④ なお、軽度発達障害児の〈学習-家庭生活〉支援課題の項目に関する補足的な検討として、公立A小学校における特別な支援を必要とする児童50名の保護者の中から数名に聞き取りを行い、抽出された軽度発達障害児の〈学習-家庭生活〉支援課題の項目が、保護者においても支援課題として認識されているかどうかの確認を行う。その際、保護者の意見は具体的な行為(***してほしい)やサービス名として出されることが多いため、予め軽度発達障害児の〈学習-家庭生活〉支援課題に対応すると考えられるサービスを整理し、確認のための補助線を得ることとした。

(2) 結果

1) 公的なサービスの対象であった障害児群との支援課題の比較

公的なサービスの対象であった障害児群（これまでの特殊教育の対象の障害）の心身障害の児童については、軽度発達障害児群に比べ、早い段階から、教育のみならず、他機関の支援の必要性が早くから認識されてきた。このことは、学校場面だけでなく、家庭などにおいても支援を必要としていることの表れであると考えられる。では、公的なサービスの対象であった障害児ではどのような事柄が支援課題として把握されているのであろうか。公的なサービスの対象であった障害児を対象としたニーズ調査の先行研究を元に、公的なサービスの対象であった障害児群における支援課題を概観する。紙本ら（2002）、日本自閉症協会京都府支部専門部会（2001）、臼井ら（1998）、横浜障害児を守る連絡協議会（1997）これらの公的な支援の対象である障害児群における先行研究により、支援課題の整理を行った。それにより、公的なサービスの対象であった障害児における支援課題は以下の事柄に整理される。整理された支援課題は、Figure32に示す。

公的なサービスの対象であった障害児群と、軽度発達障害児群における支援課題は、近似する部分もあるが、公的なサービスの対象であった障害児群において、より複数の支援課題を抱えている項目が存在した。「身辺自立」、「家庭場面課題」、「子育て不安」「社会への参加」「送迎・移動」である。これらにおける小項目は、軽度発達障害児群の支援課題とは異なるが、大項目の分類としては、一致すると考えられる。また、どの項目においても、家庭基盤と関連があることがわかった。これらことから、「身辺自立」、「家庭場面課題」、「子育て不安」、「社会への参加」、「送迎・移動」は、軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題であると考えられる。

Figure32

公的な支援の対象である障害児の本人に関する支援課題	公的な支援の対象である障害児の家族に関する支援課題
<p>①障害特性 こだわり、パニック、声・奇声、感覚過敏、多動、我慢が無い・勝手な行動</p> <p>②社交とコミュニケーション コミュニケーションの困難さ</p> <p>③身辺自立 生活リズム、睡眠、身辺処理、外出訓練、親が仕事で不在、1～2年の自立訓練施設、一人にさせられない</p> <p>④健康・安全・心理医療ケア てんかん発作、気分の波</p> <p>⑤社会的行動問題</p> <p>⑥学校－家庭協働課題 問題となる行動（他傷、物壊し、高所あがり）、不登校、引きこもり、単独通園保障、個々に応じた通学保障、寄宿舎の充実、遊びの場と相手、同世代で友人になってくれる人、進路相談、進路等の相談</p> <p>⑦学校場面課題 育ちの保障、普通学級に籍があっても障級の指導を受けたい</p> <p>⑧家庭場面課題 余暇活動の充実、家庭教師、水泳・音楽・料理・スポーツ教室、マラソンのコーチ</p>	<p>①養育態度</p> <p>②保護者の子ども理解</p> <p>③子育てストレス 医療機関、アドバイザー（療育に関する情報、制度に関する情報）、相談機関・相談支援（療育・家庭）、具体的援助者（ヘルパー）、親亡き後の不安、緊急時の備え</p> <p>④保護者の身体・心理的健康 母親の体調、家族の病気</p> <p>⑤社会への参加 長期休暇の問題、学童保育、夏期休業中のケア、施設体験の利用、家族が気がねなく泊まれる所、レスパイト、一時預かり、慣れた場所でのショートステイ キャンプ・合宿等とまりを含めた生活体験の場や地域でのふれあいの場、通園先での計画的な宿泊</p> <p>⑥きょうだいに関する問題 きょうだいのこと、きょうだいの用事</p> <p>⑦家庭内の問題 家庭内の事情</p> <p>⑧送迎・移動 送迎援助</p>

2) 支援群の支援課題の中から、家庭基盤に関わると考えられる項目の特定および、3 群すべてにおいて環境因子が関係していると思われる項目の特定

①支援群の支援課題の中から、家庭基盤に関わると考えられる項目の特定

まず、支援群における特徴的な傾向を取り上げる理由として、障害を有していないにも関わらず、支援群の児童は、学習に何らかの問題を抱えている。このことは、支援群には、学習を阻害するなんらかの要因が存在するということである。問題の所在でも述べてきたとおり、障害を有している場合には、障害起因となり、学習の低下を招くことがある。支援群においては、障害を有していないことから、障害起因でないことがわかる。では、支援群における学習の低下を招く要因はなんであろうか。軽度発達障害でも指摘したとおり、家庭基盤の脆弱性は、学習意欲を持つ妨げとなる。支援群においては、この家庭基盤の脆弱性が学習の低下に影響を与えていると考える。つまり、支援群における特徴的な支援課題の中には、家庭基盤の脆弱性と関連する項目を含んでいると考える。支援群における特徴的な支援課題を以下の Figure33 に示す。

Figure33

支援群に特徴的な本人に関する支援課題	支援群に特徴的な家族に関する支援課題
<ul style="list-style-type: none"> ①障害特性 衝動性 ②社交とコミュニケーション ③身辺自立 身辺自立、保護者の不在時の問題、最低限生活保障 ④社会的行動問題 反抗的態度、暴言・暴力 ⑤健康・安全・心理医療ケア ストレス症状 ⑥学校－家庭協働課題 忘れ物、宿題 ⑦学校場面課題 ⑧家庭場面課題 	<ul style="list-style-type: none"> ①養育態度 虐待・ネグレクトの疑い ②保護者の子ども理解 ③子育てストレス ④保護者の身体・心理的健康 ⑤社会への参加 外国人の親 ⑥きょうだいに関する問題 きょうだいの数 ⑦家庭内の問題 単親家庭 ⑧送迎・移動

支援群に特徴的な支援課題の中には、〈学習－家庭生活〉支援課題であると考えられる項目存在した。それらの項目は、軽度発達障害児群においても支援課題である。このことから、軽度発達障害児の本人に関する支援課題の身辺自立、保護者の不在時の問題、最低限の生活の保障、忘れ物、宿題、軽度発達障害児の家族に関する支援課題の虐待やネグレクトの疑い、外国人の親、きょうだいの数、単親家庭が軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題であると考えられる。

②3 群すべてにおいて環境因子が関係していると思われる項目の特定

特別な支援を必要とする児童 50 名における支援課題に対して、軽度発達障害児群、その他の障害児群、支援群の 3 群比較のみならず、学年×群における比較を行ったことで、3 群の比較では、ある傾向を示しているように見えるが、実際には、群における傾向を示していない項目が存在した。例えば、3 群比較では、軽度発達障害児群が高い割合で該当している項目で、低学年の軽度発達障害児群に該当があるが、高学年の軽度発達障害児群には該当がなく、高学年のその他の障害児群、支援群には該当があるが、低学年のその他の障害児群、支援群には該当がないといったような項目である。

それらに該当する項目は、必ずしも障害等個人因子に起因する支援課題とは言い切れない可能性がある。その場合には、障害要因以外のなんらかの因子が関連しているはずである。障害に起因しない場合、なんらかの環境的な因子が関係していると考えられる。児童が過ごす大半の環境は、学校と家庭であるといえる。障害に起因していないと考えられる支援課題の中で、家庭環境に関連すると思われる事柄については、安定した家庭環境の状態ではない可能性がある。不安定な家庭の状況は、学習に影響を及ぼすと考えられることから、環境因が関連していると思われる項目の中で家庭に関連する項目は、〈学習－家庭生活〉支援課題が含まれていると考える。以下の Figure34 に環境因子が関連している支援課題を示す。

Figure34

環境因子が関連している本人に関する支援課題	環境因子が関連している家族に関する支援課題
<ul style="list-style-type: none"> ①障害特性 ②社交とコミュニケーション ③身辺自立 生活リズム ④社会的行動問題 社会的行動問題 ⑤健康・安全・心理医療ケア 身体症状、ストレス症状、衛生面 ⑥学校－家庭協働課題 宿題、不登校・登校渋り、遅刻、通学の安全 ⑦学校場面課題 ⑧家庭場面課題 親子間の問題 	<ul style="list-style-type: none"> ①養育態度 ②保護者の子ども理解 ③子育てストレス ④保護者の身体・心理的健康 保護者の障害・疾患 ⑤社会への参加 ⑥きょうだいに関する問題 ⑦家庭内の問題 金銭面の問題 ⑧送迎・移動

環境因子が関連している支援課題の項目において、〈学習－家庭生活〉支援課題であると考えられる項目は、特別な支援を必要な児童の本人に関する支援課題の生活リズム、宿題、不登校・登校渋り、遅刻、交通の安全、親子間の問題、特別な支援を必要な児童の家族に関する支援課題、保護者の障害・疾患、金銭面であると考えられる。これらの項目は、軽度発達障害児群においても同様に支援課題であることから、軽度発達障害児群の〈学習－家庭生活〉支援課題であると考えられる。

(3) 軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題の特定

これまでの作業の結果、軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題であると考えられる項目の特定をおこなった。軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題であると考えられる項目を以下の Figure35 に示す。

軽度発達障害の〈学習－家庭生活〉支援課題は、①身辺自立の小項目、身辺自立、生活リズム、保護者の不在時の問題、最低限の生活の保障、②学校－家庭協働課題の小項目、忘れ物、宿題、不登校・登校渋り、遅刻、通学の安全③家庭場面課題の小項目、親子間の問題、余暇活動の充実④養育態度の小項目、虐待・ネグレクトの疑い⑤子育てストレスの小項目、医療機関、アドバイザー（療育に関する情報、制度に関する情報）、相談機関・相談支援（療育・家庭）、具体的援助者（ヘルパー）、親亡き後の不安、緊急時の備え⑥保護者の身体・心理的健康の小項目、保護者の障害・疾患⑦

社会への参加の小項目、外国人の親、長期的な休業時のケアをしてくれる機関、急な時に対応し、預かってくれる場所、ある一定の期間預かってもらえる場所⑧きょうだいに関する問題の小項目、きょうだいの数⑨家庭内の問題の小項目、金銭面、単親家庭⑩送迎・移動の小項目、送迎・移動であると特定した。

Figure35

軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題	
①	身辺自立 身辺自立、生活リズム、保護者の不在時の問題、最低限の生活の保障
②	学校－家庭協働課題 忘れ物、宿題、不登校・登校渋り、遅刻、通学の安全
③	家庭場面課題 親子間の問題、余暇活動の充実
④	養育態度 虐待・ネグレクトの疑い
⑤	子育てストレス 医療機関、アドバイザー（療育に関する情報、制度に関する情報）、相談機関・相談支援（療育・家庭）、具体的援助者（ヘルパー）、親亡き後の不安、緊急時の備え
⑥	保護者の身体・心理的健康 保護者の障害・疾患
⑦	社会への参加 外国人の親、長期的な休業時のケアをしてくれる機関、急な時に対応し、預かってくれる場所、ある一定の期間預かってもらえる場所
⑧	きょうだいに関する問題 きょうだいの数
⑨	家庭内の問題 金銭面、単親家庭
⑩	送迎・移動 送迎・移動

（４）軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題の補足的検討

1) 軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題より想定される支援内容の抽出

これまでの作業により、軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題の特定を行った。それらの項目が、実際に、軽度発達障害児の保護者が望んでいる支援課題であるかどうかを補助的な検討として確認を行う。しかしながら、保護者の意見は具体的な行為（**してほしい）やサービス名として出されることが多いため、予め軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題に対応すると考えられるサービスを整理し、確認のための補助線を得ることが必要であると考えられる。

そこで、軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題の項目ごとに、必要であると考えられる支援内容の想定を行った。軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題から想定される支援内容は、①自立訓練支援、②レスパイトサービス、③デイサービス、④移動支援、⑤生活支援、⑥ショートステイ、⑦相談支援であると考えられ、これらを取り取りから明らかになった事柄の検討における補助線とする。保護者による聞き取りにおいてもこれらの実際的な支援内容に対する要望があるのではないかと考える。

2) 公立A小学校における特別な支援を必要とする児童の保護者からの聞き取り

聞き取りの方法は、公立A小学校の特別支援教育コーディネーターにより面談により行った。聞き取りの対象は、公立A小学校の特別な支援を必要としている児童 50 名の保護者の中から、軽度発達障害児群 2 名、その他の障害児群 2 名、支援群 1 名を選出した。聞き取りの期間は、平成 18 年

12月である。聞き取り内容は、大きく分類すると以下の5点である。①特別な支援を必要とする児童50名における支援課題の大項目16項目について支援してほしい事柄、②学校におけるこれまでの支援でよかった事柄、③学校における支援でもう少し支援してほしい事柄、④家庭への支援でよかった事柄、⑤家庭への支援でもう少し支援してほしい事柄。聞き取りの手順は次の通りである。聞き取りに際して、フェイスシートを用意した（巻末資料④【聞き取り用フェイスシート】参照）。特別な支援を必要とする児童50名における支援課題の大項目の名称の中には、聞き取りを受ける保護者がマイナスに受け取る項目も存在するため、保護者自身が受け入れやすい名称に変更し、それぞれの項目がわかりやすいようにするためである。

聞き取りにおける結果から、今回明らかにしたいのは、〈学習—家庭生活〉支援課題であることから、それぞれの群において家庭に関連する支援課題として挙げられた項目についてまとめる。

Figure36

<p>軽度発達障害児群</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長期休み、放課後の学習支援 ・保護者への相談支援 ・NPO法人など地域における資源 ・PTAによる研修会の充実 ・コーディネーターによる相談支援 	<p>支援群</p> <ul style="list-style-type: none"> ・放課後、勉強や遊びの面倒を見てくれる場 ・夜間の相談支援 ・子どもを預ける場所 ・自分のスキルアップするために費やせる時間がほしい ・いつでも相談できる人 ・きょうだいの抱えている問題に対する支援をしてくれる場所 ・時間・お金・家庭内のことを相談できる人 ・子どもの安全の確保に関する支援 ・残って勉強できる場所 ・子どもの友人作りの場
<p>その他の障害児群</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習を見てくれるNPO ・子どもの遊び相手 ・子育てに関する相談 ・放課後支援で勉強を見てくれる場 ・相談支援 ・NPOなどの地域資源 	

それぞれ挙げられた支援の内容が、想定したどの支援内容に対応するのかを以下に示すこととする。保護者の望む支援の内容は、軽度発達障害児群と、その他の障害児群では、「デイサービス」と「相談支援」のみであり、支援群では、「デイサービス」「相談支援」に加え、「レスパイトサービス」「移動支援」に関する支援内容を望んでいた。軽度発達障害児群において、望まれる支援として挙げられてきた支援内容が、「デイサービス」と「相談支援」のみであったことは、予想外であった。

3) 軽度発達障害児の〈学習—家庭生活〉支援課題に関するまとめ

今回、予想されたような支援内容に対する要望が出てこなかった理由をさぐるために、公立A小学校における特別支援教育コーディネーターにも聞き取りを行った。それにより、予想された支援内容が出てこなかった理由として、①公的な福祉サービスについてあまりよく知らない②今現在、地域で利用できる資源が限られていることを認識している③代わりとなる資源を持っている④現在の公的な支援で足りているということが挙げられた。学校に望む支援の中には、「AT（アシスタントティチャー）を設置して、身辺自立に関する支援をしてほしい。」といったような要望も挙げられ

ていた。公立A小学校では、保護者の相談支援に関しても、特別支援教育コーディネーターが深夜まで対応するなど、支援を提供している。他にも、支援群の児童の通学の安全が必要な際には、保護者による支援ができない時には、公立A小学校の教員によって支援が行われた。これは、「移動支援」にあたる支援であると考えられる。これらのことから、軽度発達障害児を初めとする特別な支援を必要とする児童は、多くの〈学習－家庭生活〉支援課題があることは明らかである。それに伴い自立訓練支援、レスパイトサービス、デイサービス、移動支援、生活支援、ショートステイ、相談支援などの支援内容が必要になると考えられる。しかしながら、保護者による認識としては、まだ強く望まれていないのが現状である。

今後の課題

今回の研究において、軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題を特定した。しかしながら、補助的な検討として行った聞き取りでは、本研究において導き出された支援内容と、保護者より要望される支援内容は、一部のみしか一致しなかった。その理由として、軽度発達障害に対する公的な支援が少ないことが影響していると考えられる。平成19年度から、特別支援教育体制が本格的に実施される。それに伴い、軽度発達障害に対する支援もより充実していくと考えられる。特別支援教育体制下で提供される支援の記録は、今回明らかとなった軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題が実際に支援課題であるかの検証する手立てとなると考えられる。今後蓄積されていく支援の記録を下に、軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題の項目検証を行っていきたいと考える。

また、今回は軽度発達障害児の〈学習－家庭生活〉支援課題を明らかにすることを目的として研究を進めた。しかしながら、特別な支援を必要としている児童の中には、障害を有さない児童が多く存在することや、それらの児童が、支援課題のなかに傾向を示していることから、障害を有さない特別な支援を必要としている児童に対しての支援体制の構築が課題となると考える。実際に、平成16年に文部科学省から「学校と関係機関等との行動連携を一層推進するために」が出され、その中で、学校における児童生徒のいじめ、暴力行為・非行などの問題行動、不登校に対しても、連携を結び対応していくことが重要であることが示されている。これらに挙げられる児童は、障害はないが支援を必要とする児童を想定していると考えられる。公立A小学校においてはすでに取り組みされているが、障害をもつ児童のみならず、支援が必要な児童全てに対応する支援体制の構築が今後の課題である。軽度発達障害のみならず、全ての児童のための支援を行う学校体制に関する調査が望まれる。

VI. 本研究における引用文献

- 浅井朋子、杉山登志郎、小石誠二、東誠、並木典子、海野千畝子（2004）軽度発達障害児が同胞に及ぼす影響の検討、児童青年精神医学とその近接領域、45（4）、360-371.
- 石井久雄編（2005）小学生まるごとデータ（学研版小学生白書）2004-2005、学習研究社、104.
- 井上清一、高山佳子（2005）通常の学級に在籍する「特別な教育的ニーズを持つ児童」の実態—支援体制に向けて—、横浜国立大学教育人間科学部紀要 I 教育科学 7、69-82.
- 臼井真澄、今井幸一、和田真一、須藤哲、鹿野智子（1998）地域療育等支援事業へのニーズから地域福祉を考える：特にニーズ調査から見えてきたこと、発達障害研究、20、（1）、25-34.
- 小野學、篠原吉徳（2006）特別支援教育における校内支援体制の検証、日本特殊教育学会第 44 回大会発表論文集、176.
- 学習障害及びこれに類似する学習上の困難を有する児童生徒の指導方法に関する調査研究協力者会議（1999）、学習障害者に対する指導について（報告）「学習障害の判断・実態把握基準（試案）」
- 学校と関係機関との行動連携に関する研究会（2004）学校と関係機関等の行動連携を一層推進するために
- 紙本早知子、谷口良子、安田久美子、小枝達也、大谷恭一、八木啓子、勢川義夫（2002）夏期学童保育に関する保護者の意識・ニーズ調査—アンケート調査とフォーカス・グループ・インタビューから—、鳥取大学教育地域科学部紀要教育・人文科学、第 4 巻、第 1 号、63-79.
- 厚生労働省（2005）発達障害者支援法
- 小枝達也（1996）合併する身体障害に対して、LD の教育と医学、学研、109.
- 小枝達也（2005）5 歳児健診の実践の立場から、発達障害研究、27、（2）、98-101.
- 小長井香苗（2006）特別支援教育に学校全体で取り組む体制作りに関する研究—T 小学校「校内支援システム」を手がかりに—、東京学芸大学卒業論文
- 杉山登志郎（2005a）アスペルガー症候群の現在、そだちの科学、5、日本評論社、9-21.
- 杉山登志郎（2005b）ひきこもりと高機能広汎性発達障害、こころの科学 123 ひきこもり、36-43.
- 鈴木智子、中野明德（2002）学習障害、注意欠陥多動性障害の子どもたちの自尊心、福島大学教育実践研究紀要、第 42 号、71-78.
- 宋慧珍、伊藤良子、渡邊裕子（2004）高機能自閉症・アスペルガー障害の子どもたちと親の支援ニーズに関する調査研究、東京学芸大学紀要 1 部門、55、325-333.
- 田中康雄（2004）ADHD の明日に向かって第 2 版、星和書店、148.
- 田中康雄（2005a）発達障害と児童虐待（Maltreatment）、子どもの虐待とネグレクト、7（3）、304-311.
- 田中康雄（2005b）発達障害と非行、現代のエスプリ 461 非行臨床の理論と実際、38-49.
- 田村ゆき子（1997）健全な自尊心を育む、児童心理、51（7）、金子書房、626-631.
- 中央教育審議会（2005）平成 17 年度小・中学校における LD・ADHD・高機能自閉症等の児童生徒への教育支援に関する体制整備の実施状況調査結果について【概要】
- 通級に関する調査研究協力者会議（1992）通級による指導に関する充実施策について
- 辻井正次（2003a）高機能自閉症児の特別支援教育の現状と課題、発達障害研究、24、（4）340-347.
- 辻井正次（2003b）軽度発達障害の就労支援の実際と課題、小児の精神と神経、43（3.4）205-212.
- 特殊教育研究調査協力者会議（1982）心身障害児に係る早期教育および後期中等教育の在り方報告
- 特殊教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議（1997）特殊教育の改善・充実について第二次報告
- 特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議（2003）今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）
- 内閣府政策統括官・障害者施策推進本部（2002）障害者基本計画・重点施策実施 5 か年計画
- 永井明子、納富恵子（2006）学齢期高機能広汎性発達障害児の母親のニーズに関する研究、日本自閉症協会京都府支部専門部会（2001）自閉症の人たちの生活状況と家族のニーズからみた必要な援助、Aigo、48、（3）、50-59.
- 日本特殊教育学会第 44 回大会発表論文集、272.
- 21 世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議（2001）21 世紀の特殊教育の在り方について～一人ひとりのニーズに応じた特別な支援の在り方について～（最終報告）
- 根来あゆみ、山下光、竹田契一（2004）軽度発達障害児の主観的育てにくさ感、発達、97（25）、ミネルヴァ書房、13-18.

- 芳賀彰子 (2006) 注意欠陥多動性障害、高機能自閉症児をもつ母親の不安・うつに関する心身医学的検討、心身医学、46 (1)、日本心身医学会、75-86.
- 橋本創一、霜田浩信、林安紀子、池田一成、小林巖、大伴潔、菅野敦編 (2006) 障害児のアセスメントと支援コーディネートのために特別支援教育の基礎知識、明治図書、193.
- 細井保宏 (2005) 軽度発達障害の兆候を有する非行少年の鑑別、刑政、115、(1) 112-124.
- 本郷一夫、澤江幸則、鈴木智子、小泉嘉子、飯島典子 (2003) 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査研究、発達障害研究、25、(1)、50-61.
- 松下真由美 (2003) 軽度発達障害児を持つ母親の障害受容家庭についての研究、応用社会学研究、東京国際大学大学院社会学研究科、第13号、27-52.
- 松田美智子 (2006) 虐待と非行、現代のエスプリ 462 非行臨床の課題、84-94.
- 松本敏治、安藤房治、飯田かおり、(2002) 青森県における LDADHD 等児童・生徒の教育的・社会的ニーズ弘前大学教育学部紀要、87、187-196.
- 南真嘉、中田洋二郎、鶴巻正子 (2004) AD/HD をもつ子どもの自己評価に関する研究、福島大学教育実践研究紀要第46号、69-74.
- 宮本信也 (2004) 子どもの自立に対する小児科医の援助、小児臨床、57 増刊号、1389 - 1400.
- 文部科学省 (2004) LD (学習障害) ADHD (注意欠陥/多動性障害) 高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン (試案)
- 山口裕子 (2005) 軽度発達障害児の親の語りと「親の会」の結束、保健科学研究誌、2、41-50.
- ユネスコ (1985) 「学習権の宣言」
- 横浜障害者を守る連絡協議会 (1997) わたしたちが願うふつうの暮らし連絡協生活実態調査から見えてきたもの
- 吉川徹 (2006) アスペルガー症候群—思春期以降の合併症と自殺、現代のエスプリ 464 アスペルガー症候群を究める I、143-150.

資料①

資料②

資料③

資料④ 【ニーズ対応整理表】

問題（ニーズ）と対応

問題点（ニーズ）	家庭での対応・現状	対応	結果

資料⑤ 【聞き取り用フェイスシート】

充実した支援を継続するために

公立A小学校では、これまでの取り組みを振り返りながら、よりすてきな支援をつづけ、充実した支援を継続していきたいと思っています。これまでの公立A小学校での支援を整理すると、お子さんやご家庭に対して、16個の支えたい事柄ができました。お子さんが安心して学習をしていくために、支援は足りているのか？もっと必要な支援がないか？を伺い、よりよい支援をしていきたいと考えています。学校から、お子さんや家庭に対して支援してほしい事柄についてお伺いします。

学校がお子さんに対して支援したいと思う事柄

- 充実させてほしい学習支援

[]

- 対人交流の促進

[]

- 身の回りの整理

[]

- 困った行動や乱暴な行為に対する支援

[]

- 体の健康や心の悩みに配慮する支援

[]

- 登校支援、卒業後についてなど学校と家庭で協力していただくこと

[]

- お子さんの家庭生活充実のための支援

[]

- お子さんの行動特徴に合わせた支援

[]

学校がご家庭に対して支援したい事柄

- 子育て支援に関する事柄

[]

● お子さんに対する理解に関すること

()

● 子育てをする上でのメンタルヘルスや健康に関することから

()

● 保護者の方の地域での生活を豊かにするための支援

()

● きょうだいに関する関わり方

()

● 子どもの送り迎えなど

()

● 保護者の方の自由な時間や余暇支援

()

● その他、ご家庭の中で困っていること

()

よりよい支援を行うためにお伺いします

☆学校がお子さんに対して行ってきた支援の中でよかったことはありますか？教えてください

()

☆学校で、お子さんに対して、もう少し支援をしてほしいところはありますか？教えてください

()

☆お子さんの勉強や学校生活に関わって、ご家庭への支援でよかったことはありますか？教えてください

()

☆お子さんの勉強や学校生活に関わって、ご家庭に対してもう少し支援がほしいところはありますか？教えてください

()

巻末資料⑥ 作業課題②各項目における傾向分析の表

Table73

①障害特性

カウント数 →109 (26.7%)

支援課題		軽度群 16人	学年別		その他群 15人	学年別		支援群 19人	学年別	
			低12	高4		低10	高5		低13	高6
衝動性 18人	人	6	3	3	3	0	3	9	3	6
	%	38	25	75	20	0	60	47	23	100
多動性 24人	人	10	8	2	5	2	3	9	8	1
	%	63	67	50	33	20	60	47	62	17
注意欠陥 20人	人	9	6	3	5	3	2	6	5	1
	%	56	50	75	33	30	40	32	38	17
聴覚認知 14人	人	5	4	1	4	3	1	5	5	0
	%	31	33	25	27	30	20	26	38	0
空間認知 8人	人	4	4	0	2	2	0	2	2	0
	%	25	33	0	13	20	0	11	15	0
状況判断 4人	人	3	0	3	0	0	0	1	0	1
	%	19	0	75	0	0	0	5	0	17
不器用 10人	人	4	2	2	4	3	1	2	1	1
	%	25	17	50	27	30	20	11	8	17
学習障害 1人	人	1	0	1	0	0	0	0	0	0
	%	6	0	25	0	0	0	0	0	0
言語障害 5人	人	0	0	0	5	4	1	0	0	0
	%	0	0	0	33	40	20	0	0	0
こだわり 5人	人	4	3	1	1	0	1	0	0	0
	%	25	25	25	7	0	20	0	0	0

Table75

カウント数 →22 (5.4%)

③身辺自立

支援課題		軽度群 16人	学年別		その他群 15人	学年別		支援群 19人	学年別	
			低12	高4		低10	高5		低13	高6
身辺自立 6人	人	1	1	0	2	2	0	3	2	1
	%	6	8	0	13	20	0	16	15	17
生活リズム 4人	人	2	2	0	1	0	1	1	0	1
	%	13	17	0	7	0	20	5	0	17
保護者の不在時の問題 11人	人	2	2	0	2	2	0	7	7	0
	%	13	17	0	13	20	0	37	54	0
最低限の生活保障 1人	人	0	0	0	0	0	0	1	1	0
	%	0	0	0	0	0	0	5	8	0

Table76

カウント数 →33 (8.1%)

④社会的行動問題

支援課題		軽度群 16人	学年別		その他群 15人	学年別		支援群 19人	学年別	
			低12	高4		低10	高5		低13	高6
反抗的態度	人	2	1	1	1	1	0	7	4	3
10人	%	13	8	25	7	10	0	37	31	50
暴言・暴力	人	7	4	3	2	1	1	9	6	3
18人	%	44	33	75	13	10	20	47	46	50
社会的行動問題	人	3	3	0	1	0	1	1	0	1
5人	%	19	25	0	7	0	20	5	0	17

Table77

カウント数 →60 (14.7%)

⑤健康・安全・心理医療ケア

支援課題		軽度群 16人	学年別		その他群 15人	学年別		支援群 19人	学年別	
			低12	高4		低10	高5		低13	高6
合併症	人	2	2	0	1	1	0	0	0	0
3人	%	13	17	0	7	10	0	0	0	0
身体症状	人	3	3	0	5	2	3	2	2	0
10人	%	19	25	0	33	20	60	11	15	0
ストレス症状	人	2	2	0	1	0	1	3	2	1
6人	%	13	17	0	7	0	20	16	15	17
衛生面	人	1	1	0	0	0	0	1	1	0
2人	%	6	8	0	0	0	0	5	8	0
精神的幼さ	人	0	0	0	4	3	1	0	0	0
4人	%	0	0	0	27	30	20	0	0	0
情緒	人	7	4	3	4	2	2	3	2	0
13人	%	44	33	75	27	20	40	16	15	0
敏感さ	人	4	2	2	2	2	0	1	0	1
7人	%	25	17	50	13	20	0	5	0	17
自己主張が強い	人	0	0	0	2	1	1	1	1	0
3人	%	0	0	0	13	10	20	5	8	0
感情表出が少ない	人	0	0	0	1	1	0	1	0	1
2人	%	0	0	0	7	10	0	5	0	17
自殺願望	人	2	1	1	1	0	1	0	0	0
3人	%	13	8	25	7	0	20	0	0	0
うつの症状	人	2	2	0	1	0	1	0	0	0
3人	%	13	17	0	7	0	20	0	0	0
自信がない	人	2	1	1	2	2	0	0	0	0
4人	%	13	8	25	13	20	0	0	0	0

Table78

⑥学校-家庭協働課題

カウント数 →44 (10.8%)

支援課題		軽度群 16人	学年別		その他群 15人	学年別		支援群 19人	学年別	
			低12	高4		低10	高5		低13	高6
忘れ物	人	1	1	0	1	0	1	4	2	2
6人	%	6	8	0	7	0	20	21	15	33
宿題	人	2	0	2	1	1	0	3	3	0
6人	%	13	0	50	7	10	0	16	23	0
不登校・登校渋り	人	2	2	0	2	1	1	2	2	0
6人	%	13	17	0	13	10	20	11	15	0
遅刻	人	1	1	0	1	0	1	0	0	0
2人	%	6	8	0	7	0	20	0	0	0
通学の安全	人	1	1	0	0	0	0	1	1	0
2人	%	6	8	0	0	0	0	5	8	0
問題となる行動	人	5	4	1	2	1	1	4	2	2
11人	%	31	33	25	13	10	20	21	15	33
偏食・好き嫌い	人	2	2	0	1	1	0	0	0	0
3人	%	13	17	0	7	10	0	0	0	0
薬の服用	人	4	2	2	0	0	0	0	0	0
4人	%	25	17	50	0	0	0	0	0	0
卒業後の進路	人	4	2	2	0	0	0	0	0	0
4人	%	25	17	50	0	0	0	0	0	0

Table79

⑦学校場面課題

カウント数 →70 (17.2%)

支援課題		軽度群 16人	学年別		その他群 15人	学年別		支援群 19人	学年別	
			低12	高4		低10	高5		低13	高6
学習取り組み姿勢の問題 15人	人	4	2	2	5	3	2	6	4	2
	%	25	17	50	33	30	40	32	31	33
学習の遅れ 32人	人	10	7	3	12	9	3	10	7	3
	%	63	58	75	80	90	60	53	54	50
いじめをする 6人	人	3	1	2	0	0	0	3	2	1
	%	19	8	50	0	0	0	16	15	17
いじめを受ける 3人	人	3	2	1	0	0	0	0	0	0
	%	19	17	25	0	0	0	0	0	0
集団行動 2人	人	1	0	1	1	0	1	0	0	0
	%	6	0	25	7	0	20	0	0	0
教室不応 5人	人	3	2	1	2	1	1	0	0	0
	%	19	17	25	13	10	20	0	0	0
学校生活行動 7人	人	2	2	0	3	1	2	2	1	1
	%	13	17	0	20	10	40	11	8	17

Table80

⑧家庭場面課題

カウント数 →9 (2.2%)

支援課題		軽度群 16人	学年別		その他群 15人	学年別		支援群 19人	学年別	
			低12	高4		低10	高5		低13	高6
親子間の問題 7人	人	4	4	0	2	0	2	1	1	0
	%	25	33	0	13	0	40	5	8	0
家庭内暴力 2人	人	2	2	0	0	0	0	0	0	0
	%	13	17	0	0	0	0	0	0	0

Table81

①養育態度

カウント数 →14 (16.7%)

支援課題		軽度群 16人	学年別		その他群 15人	学年別		支援群 19人	学年別	
			低12	高4		低10	高5		低13	高6
虐待・ネグレクトの疑い 10人	人	4	3	1	1	0	1	5	4	1
	%	25	25	25	7	0	20	26	31	17
不適切な養育態度 4人	人	0	0	0	2	0	2	2	1	0
	%	0	0	0	13	0	40	11	8	0

Table82

②親の子ども理解

カウント数 →16 (19.0%)

支援課題		軽度群 16人	学年別		その他群 15人	学年別		支援群 19人	学年別	
			低12	高4		低10	高5		低13	高6
親の子ども理解	人	6	5	1	5	3	2	5	4	1
16人	%	38	42	25	33	30	40	26	31	17

Table83

③子育てストレス

カウント数 →14 (16.7%)

支援課題		軽度群 16人	学年別		その他群 15人	学年別		支援群 19人	学年別	
			低12	高4		低10	高5		低13	高6
保護者の真剣な養育態度	人	5	3	2	1	1	0	1	0	1
7人	%	31	25	50	7	10	0	5	0	17
子育てに対する不安	人	2	2	0	0	0	0	1	1	0
3人	%	13	17	0	0	0	0	5	8	0
養育困難	人	2	2	0	0	0	0	2	1	1
4人	%	13	17	0	0	0	0	11	8	17

Table84

④保護者の身体・心理的健康

カウント数 →8 (9.5%)

支援課題		軽度群 16人	学年別		その他群 15人	学年別		支援群 19人	学年別	
			低12	高4		低10	高5		低13	高6
保護者の障害・疾患	人	2	2	0	1	1	0	2	1	1
5人	%	13	17	0	7	10	0	11	8	17
保護者の心理的疾患	人	2	1	1	0	0	0	1	1	0
3人	%	13	8	25	0	0	0	5	8	0

Table85

⑤社会への参加

カウント数 →4 (4.8%)

支援課題		軽度群 16人	学年別		その他群 15人	学年別		支援群 19人	学年別	
			低12	高4		低10	高5		低13	高6
外国人の親	人	0	0	0	0	0	0	1	1	0
1人	%	0	0	0	0	0	0	5	8	0
コミュニティとの関係	人	1	1	0	2	2	0	0	0	0
3人	%	6	8	0	13	20	0	0	0	0

Table86

⑥きょうだいに関する問題

カウント数

→14 (16.7%)

支援課題		軽度群 16人	学年別		その他群 15人	学年別		支援群 19人	学年別	
			低12	高4		低10	高5		低13	高6
きょうだいに関する問題 5人	人	3	2	1	0	0	0	2	1	1
	%	19	17	25	0	0	0	11	8	17
きょうだいの数 3人	人	1	0	1	0	0	0	2	1	1
	%	6	0	25	0	0	0	11	8	17
障害を持つきょうだいの問題 2人	人	0	0	0	2	2	0	0	0	0
	%	0	0	0	13	20	0	0	0	0

Table87

⑦家庭内の問題

カウント数 →17 (20.2%)

支援課題		軽度群 16人	学年別		その他群 15人	学年別		支援群 19人	学年別	
			低12	高4		低10	高5		低13	高6
夫婦間の問題 4人	人	3	3	0	0	0	0	1	1	0
	%	19	35	0	0	0	0	5	8	0
金銭面 5人	人	2	2	0	1	1	0	2	2	0
	%	13	17	0	7	10	0	11	15	0
単親家庭 8人	人	2	2	0	0	0	0	6	6	0
	%	13	17	0	0	0	0	32	46	0

Table88

⑧送迎・移動

カウント数 →1 (1.2%)

支援課題		軽度群 16人	学年別		その他群 15人	学年別		支援群 19人	学年別	
			低12	高4		低10	高5		低13	高6
送迎・移動 1人	人	0	0	0	1	1	0	0	0	0
	%	0	0	0	7	10	0	0	0	0